【論文】

天使とキリスト

その隠れた関係

岡田温司

かつてイエス・キリストは天使（のようなもの）とみなされていたことがある。今日、イエス・キリストのことを天使と呼ぶ人はおそらく誰もいないだろう。キリストと天使とはそれぞれ異なる存在として、はっきりと区別されている。

ところが、初期キリスト教時代――とりわけ1世紀から325年のニカイア公会議の頃まで――にさかのぼるなら、両者は同一とまではいわないとしても、とてもよく似たものとみなされていた節がある。というのも、神の使いが天使の役割だとするなら、イエスもまた、神の言葉を伝えるために天から地上に遣わされた者とされ、神のメッセージをこの世に届ける役割を担っているからである。その証拠に、たとえば『ヨハネによる福音書』は、次のようなイエスのせりふを伝えている。「わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになった」（12:49）、と。

もちろん、だからといって、イエスと天使とが同一視されているというわけではないが、イエスが天使に近しいもの、天使にも比すべきものとみなされていることは否定できないだろう。本論は、初期キリスト教時代にさかのぼって、いまだわが国ではほとんど言及されることのない、天使とキリストの親密にして隠れた関係をたどる試みである。

Ⅰ．新約聖書のなかの天使とキリスト

新約聖書のなかには、たしかに、直接的にせよ間接的にせよ、救世主（メシア）としてのイエスを天使になぞらえる考え方が古くからあったことをうかがわせる記述が、そここに散見している。たとえば、1 世紀の末に使徒パウロに近い人物によって書かれたとされる『ヘブライ人への手紙』には次のようにある。

> 御子［イエス］は、天使たちより優れた者となられました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。いったい神は、かつて天使のだれに、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われ、更にまた、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」と言われたでしょうか。更にまた、神はその長子をこの世に送るとき、「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と言われました（1:4-6）。

つまりここでは、イエスが天使に勝ること、天使よりも優れた存在であることが、ことさらに強調されているのである。逆にいうとこのことは、当時ユダヤ人たちのあいだで、（少なくとも役割の点において）天使とイエスとが混同される場合もあったこと、あるいは天使崇拝とキリスト信仰とが拮抗していたことを傍証するものであるように思われる。さもなければ、この手紙の著者は、あえてヘブライ人（ユダヤ人）たちに向けて、このような警告を発する必要はなかったであろう。

右の引用の一節は、実は旧約聖書の『詩編』にある、「主はわたしに告げられた。「お前はわたしの子、今日、わたしはお前を生んだ」」（2:7）を踏まえているのだが、ほかでもなくこの部分は、ユダヤ人のあいだで伝統的にメシアの到来と結びつけて解釈されてきた。手紙の著者は、そのことをはっきりと知っていたに違いない。だからこそ、それは天使のことではない、イエスこそまさしくその人だ、と釘をさしているのである。

同じく『ヘブライ人への手紙』にはまた次のようにある。「あなた［神］は彼［イエス］を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが、栄光と栄誉の冠を授け、すべてのものを、その足の下に従わせられました」（2:7-8）。まるで念を押すかのように、ここでもふたたび、キリストと天使とがはっきり区別されること、イエスが到来した今や、後者は前者に従属することが確認されているのである。

何としても天使をキリストに従属させようとするこの手紙では、ダヴィデ王の末裔とされるイエス・キリストその人は、ひるがえって、ほとんど神にも匹敵する存在にまで高められている。その証拠に、神は「御子［イエス］によって世界を創造されました」（1:2）とすらいうのだ。

さらに、使徒ペトロ（ペテロ）が紀元後 60 年代の半ばに書いたとされる『ペトロの手

紙一』にもまた、救世主メシアたるキリストは天使をしのぐことが説かれ、「キリストは天に上って神の右におられます。天使、また権威や勢力は、キリストの支配に服しているのです」(:22) と記されている。

これら初期キリスト教時代の使徒たちの手紙が間接的に証言しているのは、繰り返しになるが、当時キリストを天使にたとえる考え方がたしかに流布していたらしいということであり、使徒たちは何とかしてそれを牽制しようとしている、ということである。このことをわたしはあえてここで強調しておきたい。

事実、パウロは別の書簡でも何度か、天使について否定的あるいは消極的に言及し、天使にたいするキリストの優位を切々と説いているのだが(『ローマの信徒への手紙』8:38-39、『コリントの信徒への手紙一』6:3; 15:24 など)、にもかかわらず、そのパウロ本人でさえ、天使とキリストとを同類のものとみなしていることをうかがわせる証言を残しているのである。いわく、「わたしを神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスであるかのように、受け入れてくれました」(『ガラテヤの信徒への手紙』4:14)、というのだ。ここでイエスと併置されている「使い」を意味するのはギリシア語の「アンゲロス」だから、パウロもまた、おそらく図らずも、キリストを天使になぞらえる当時の風潮に引きずられているのである。逆にいうと、だからこそ使徒たちは、キリストと天使のあいだに明快な境界線を引き、上下関係を打ちたてようと躍起になっていたのだ。

一方で、当時ユダヤ人たちを中心に天使崇拝が広がっていたらしいことも、同じくパウロによる書簡が証言している。たとえば『コロサイの信徒への手紙』によると、「偽りの謙遜と天使崇拝にふける者から、不利な判断を下されてはなりません。こういう人々は、幻で見たことを頼りとし、肉の思いによって根拠もなく思い上がっているだけで、頭であるキリストにしっかりと付いていないのです」(2:18-19) とされ、キリスト信仰にたいして天使崇拝が厳しく非難されていることがわかる。

ユダヤにおける天使崇拝は、終末思想と救済の期待とともに、第二神殿時代(前 516 ―後 70)に次第に高まっていったとされる。つまり、その終盤は、ちょうどイエスの時代や、その弟子たちが活躍をはじめる時代と重なり合うのである。

さらにさかのぼるなら、ユダヤ人のあいだでの天使崇拝は、古くは、たとえば旧約聖書の『トビト書』(前 3 世紀末から前 2 世紀初) のなかで、大天使ラファエルの援助のおかげで視力を回復したトビトが、感涙にむせびながら天使をたたえたという逸話に証言されている。それによると、「神のすべての天使をほめたたえます。神の大いなる御名によってわたしたちが守られますように。すべての天使をとこしえにほめたたえます」(11:14)、という。

パウロはさらに、「サタンでさえ光の天使を装うのです」(『コリントの信徒への手紙 二』11:14) と述べることで、天使と堕天使サタンの関係をそれとなく暗示すると同時に、これこそキリスト者が戦うべき相手であると説く。すなわち、「わたしたちの戦いは、[……]

支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」(『エフェソの信徒への手紙』6:12)、というわけである。ここで「諸霊」と訳されているのは、原語のギリシア語では「プネウマ」という名詞だから、パウロは、「プネウマ」と「天使」とを同一視するアレクサンドリアのフィロンのような考え方におそらく馴染んでいたものと思われる。

つまり、パウロを筆頭に使徒たちは、一方ではユダヤ教の天使崇拝にたいして、他方では異教のダイモンやゲニウスへの崇拝にたいして、新たにイエス・キリストへの信仰を打ち立てようとしていたことになる。が、天使が異教のダイモンやゲニウスと同一視されるか、ひじょうに近いものとみなされていたように、キリストと天使との境界線も、当初はかなり揺らいでいたようだ。

さらに、新約聖書の最後を飾る『ヨハネの黙示録』には、神とキリスト、天使とサタンをめぐるさまざまなタイプの幻想的イメージが跋扈しているが、そのなかには天使とキリスト、そのいずれにも解釈されてきたものがある(Carrel)。たとえば、ヨハネが何度か目にしている神の顕現(テオファニー)の輝かしい光景のいくつかがそれに当たる(1:13-16; 14:14; 19:11-16)。

これらの幻視はいずれも、旧約聖書中の預言の書である『エゼキエル書』や『ダニエル書』に起源をもつことが知られている。たとえば前者では、「わたしが見ていると、人の有様のような姿があるではないか。その腰のように見えるところから下は火であり、腰から上は琥珀金の輝きのように光輝に満ちた有様をしていた」(『エゼキエル書』8:2-3)、という。つまり、本来は不可視の神の顕現は、燃え光輝く天使的なイメージ――熾天使(セラフィム)や智天使(ケルビム)――に包まれて表現されているのである。

パトモス島のヨハネに最初に顕われるヴィジョンも同じような様相を呈している。「燭台の中央には、人の子のような方がおり、足まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めておられた。その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く、目はまるで燃え盛る炎、足は炉で精錬されたしんちゅうのように輝き、声は大水のとどろきのようであった」(『黙示録』1:13-14)。ここでいう「人の子」は、伝統的に、天使とキリストのいずれにも解釈されてきた。

一般論でいうなら、神の言葉の伝え手というその使命において、さらに神と人間とをつなぐという点で、キリストを天使にも等しいものみなす考え方が「天使キリスト論(Angel Christology)」と呼ばれるのにたいして、キリストを天使のイメージに重ね合わせる見方は「天使型キリスト論(Angelomorphic Christology)」と呼ばれて区別されているが、両者の違いもまた相対的なものである(Foster; Gieschen; Stuckenbruck)。『黙示論』のヴィジョンは、どちらかというと、後者に近いものとみなすことができるだろう。

同じく『黙示録』にはまた、「燃え盛る炎のような」目をした神的ヴィジョンが登場し、その名は「神の言葉[ロゴス]」と呼ばれ、天使たちからなる「天の軍勢」を従えている、

とある（19:12-14）。福音書記者ヨハネ――『黙示録』の著者とされるヨハネとは別人――によれば、神としての「ロゴス」が「肉［サルクス］」つまり人間となったものがイエス・キリストにほかならないから、このヴィジョンが示しているのは、当然ながらイエスその人のことであると考えられるが、その姿は人間というよりも異形の天使的な様相を呈している。しかも彼は、天使たちの「軍勢」を従えている、という。

一方、『黙示録』に大きな影響を与えたとされる『ダニエル書』（10:13-21）によれば、「天の軍勢」を率いているのは「天使長ミカエル」にほかならない。さらに『黙示録』においてミカエルは、「神のメシアの権威」（12:10）ともいいかえられているから、救世主としてのイエスと大天使との境界もまた、必ずしも明快とはいえない。しかも、やはり前章で見たように、アレクサンドリアのフィロンによれば、神のロゴスと天使とはきわめて近い存在であった（Decharneux）。

さらに、この『黙示録』における天使のごときキリストは、「正義をもって裁き、また戦われる」（19:11）という。この記述は、聖書解釈において、旧約聖書の『歴代誌 上』（21:15）に登場する、エルサレムを滅ぼすべく神によって遣わされた「御使い」、すなわち天使に依拠するとされる。しかも、この裁きの天使はまた、同じく旧約聖書のなかでも比較的新しい『知恵の書』（紀元前 1 世紀のアレクサンドリアで成立）の一節、「あなたの全能の言葉は天の王座から、情け容赦のないつわもののように、この滅びの地に下った」（18:15）と結びついて、神の「全能の言葉」としても解釈されている（Carrel）。

話がやや込み入ってきたかもしれないが、要するにここでわたしが強調しておきたいのは、救世主と神の言葉と天使とを重ね合わせる発想の起源は、すでに旧約聖書のなかにもたどることができる、という点である。

II．外典のなかの天使とキリスト

ところで、ここまで見てきたように、使徒たちが否定的で間接的にのみ言及するか、『黙示録』においてやや晦渋な言い回しで暗示されていた、天使としてのキリストという考え方が、それらよりもずっとストレートに、しかもむしろ肯定的に表明されているのが、いくつかの外典である。

たとえば、計 114 のイエスの語録からなる『トマスによる福音書』（3 世紀までに成立、1945 年に再発見、荒井献訳）のひとつには、以下のようにある。

> イエスが彼の弟子たちに言った、「私を（誰かに）比べてみなさい。（そして）私が誰と同じであるかを言ってみなさい」。シモン・ペテロが彼に言った、「あなたは義なる御使いと同じです」（13）。

ここでは、『ヘブライ人への手紙』のなかで批判されていたキリスト＝天使説が、正面から堂々と主張されていて、明らかに論争的な意図をもって著わされたことがわかる。

さらに顕著なのが、2 世紀の興味深い黙示文学『ヘルマスの牧者』（荒井献訳）である。5 つの「まぼろし」ないし「啓示」、12 の「いましめ」、そして 10 の「たとえ」からなるこの特異な使徒教父文書は、訳者の解説によると、「おそらくローマ郊外に農園を所有する一般信徒」ヘルマスなる人物によって著わされ、2・3 世紀に広く読まれたという。

何よりも特徴的なのは、全編にさまざまな天使たちが次々と登場してくることである。ほぼ登場順に並べてみるなら、6 人の「最初に創られた、神の聖なるみ使いたち」（「第三のまぼろし」4:1）、「最高の聖なるみ使い」（「第五の啓示」1）、「悔改めのみ使い（天使）」（「第五の啓示」7、「第十二のいましめ」4:7、同 6:1、「第九のたとえ」1:1、同 23:5、同 24:3、同 31:3、同 33:1）、「至福の天使」（「第五のいましめ」1:7）、「義の天使」および「悪の天使」（「第六のいましめ」1:3-10、「第六のたとえ」3:3）、「預言の霊のみ使い」（「第十一のいましめ」9）、「聖なるみ使い」（「第五のたとえ」4:4、同 6:7）、「贅沢と欺瞞の天使」（「第六のたとえ」2:2）、「栄光の天使」（「第七のたとえ」1-3、「第八のたとえ」1:1、「第九のたとえ」1:3）、「主の天使」（「第七のたとえ」5、「第八のたとえ」1:5、同 2:1）、「懲罰の天使」（「第七のたとえ」6）、ミカエル（「第八のたとえ」3:3）、などといった調子である。

ただひとり、そしてただいちどだけ固有名詞で呼ばれている大天使ミカエルを除いて、他はすべて名前ではなくて形容句を冠して示されているが、その数の多さは、古代ローマのさまざまな守護霊（ゲニウス）とのつながりを連想させるとともに、天使崇拝の痕跡をもとどめているように思われる。

もちろん、よく読むと、これらすべてが別の天使というわけではないことがわかる。たとえば、ヘルマスに顕われる「牧者」とは「悔改めの天使」のことで、この天使が著者のヘルマスに「いましめ」や「たとえ」をつうじて語りかける。この天使をヘルマスに派遣したのは「最高の聖なるみ使い」である。こうして「悔改めの天使」はヘルマスの家に遣わされて、「生涯の残りの日々をおまえ［ヘルマス］と共に住むように」（「第五の啓示」2）なるというから、この天使は、古代ローマの異教における家の守護神ラレスにも近い存在であると考えられる。ここでも異教とキリスト教のあいだで、ある種の習合が起こっているのである。

一方、「義なる天使」には「懲罰の役が与えられている」（「第六のたとえ」3:3）ことから、「義の天使」と「懲罰の天使」とは同一とみなされていることがわかる。また、「主の栄光の天使」（「第八のたとえ」1:2）という言い回しからも推測されるように、「主の天使」と「栄光の天使」もまた同じものであるが、これらは複数形で呼ばれることもある。そのなかでも「大いなる栄光の天使」が、大天使ミカエルにほかない。著者ヘルマスによると、ミカエルは「民の上に権力を有し、彼らを支配している。彼自らが彼らに、信徒たちの心

の中に律法を与えたのである」(「第八のたとえ」3:3)。

とりわけ興味深いのは「預言の霊のみ使い」である。この天使はまた、「聖霊」とか「主の神性の霊」とかと呼びかえられる(「第十一のいましめ」9-10)。つまり、「プネウマ」と同等のものなのだ。ここにもまた、ヘレニズム的なプネウマ=天使説が影を落としている。くわえて、「第九のたとえ」に登場する「大きなからだの人」(6:1)は「神の子」つまりキリストのことをさすが、その少し前の節で「すごく背の高い主の栄光の天使」——ミカエルのこと——について聞かされている読者には、両者の区別がつきにくい。つまり、「神の子」と大天使ミカエルとのあいだにも、明快な境界線が引かれてはいないように読めるのだ。

しかも、天使について「最初に創られた、神の聖なるみ使いたち」(「第三のまぼろし」4:1)と述べる一方で、キリストについても「神の子は全被造物よりも先に生れ」(「第九のたとえ」12:2)と記される。要するに、天使も神の子も、ともに万物の創造よりも前に創られた、というのである。

さらに、「神の子のみ名は大いなるもので捉えることができず」(「第九のたとえ」14:5)とされ、キリストが特別に「神の名」を帯びていることが確認されている。これは、「神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」という、新約聖書の『フィリピの信徒への手紙』にあるせりふ(2:9)を踏まえたものである。とはいえ、旧約聖書にさかのぼるなら、天使もまた「神の名」を帯びることがある。たとえば、モーセに遣わされた神の使いは、「神の名」を帯びているがゆえに、モーセはこれに逆らってはならない、とされるのだ(『出エジプト記』23:20-21)。

もちろん、「栄光の天使たちは、神の子によらなければ、神のみもとに行くことはできない」(「第九のたとえ」12:7)とあるように、「神の子」と「天使」とをはっきりと区別して、後者にたいする前者の優位を説いているくだりもあるにはある。これは、天使とイエス・キリストとを混同してはならないと警告した『ヘブライ人への手紙』に近い主張だが、そもそもこのテクスト『ヘルマスの牧者』の全編をつうじて一貫性があるというわけでは必ずしもない(複数の著者によって書かれたとする説もあるほどだ)。

Ⅲ. 異端視された天使キリスト論と近年におけるその復活

『教義史綱要』で名高い神学者アドルフ・フォン・ハルナックによると、『ヘルマスの牧者』の著者は、異端とされた「養子的キリスト論」——イエスは洗礼を受けた時点ではじめて神の子となった——の信奉者ではなかったか、という。

あるいは、父と子と聖霊の三位一体にたいして、やはり異端的な、子と聖霊の二位一体を唱える信者によって書かれたのではないかという説もある(Gieschen)。この説によ

ると、子イエスと聖霊とは、父なる神にたいして一段下の位に置かれる。これはもちろん、325 年のニカイア公会議で正式に認められた、父と子を「同一実体（ホモウシオス）」とみなす考え方とは相容れないものである。とはいえ、2・3 世紀にさかのぼるなら、後に異端として排除され抑圧されることになる考え方を支持する一派――アリウス派やエビオン派など――がたしかに存在したのであり、わたしたちが注目したいのも、そうした実態である。

いずれにしても、『ヘルマスの牧者』は、ヘレニズムやローマの伝統の幹にキリスト教が接木されたテクストとして読むことができるもので、ここでも、「神の子」キリストと天使とプネウマとが、きわめて近い存在として描かれているのである。

『トマスによる福音書』や『ヘルマスの牧者』のような、初期キリスト教時代の外典が示しているのは、キリストと天使とを同等か、ほぼ同等のものとみなすような考え方が、たしかにあったということであり、早くもすでに福音書記者や使徒パウロたちは、これを何とか抑えようとしていた、ということである。

これにたいして、その説に関して好意的な教父や神学者がいなかった、というわけではない。たとえば、殉教者ユスティノスの『第一弁明』（63）によれば、「神の子とはそのロゴスのことです。またこのかたは、天使（告げ知らせる者）とも使徒（遣わされた者）とも呼ばれます。なぜなら彼こそが必要な知識を告げ知らせ、また己に告げられたことを解き明かすために遣わされているからです」（柴田有訳）。同書にはまた、「御子に似た善天使の軍団」（6）とも記されている。「御子」とはもちろんイエスのことにほかならない。

さらに、オリゲネスの『ケルソス駁論』（5:52-53）によれば、「人類全体に到来した彼［イエス］の業は、［中略］単純に天使の業ではなく、彼に関する預言が名付けたように、「偉大なる熟慮」（イザ九・六）の天使のそれである」（出村みや子訳）という。ここでオリゲネスは、旧約聖書の『イザヤ書』に依拠して、イエス・キリストを天使（新共同訳では「万軍の主の熱意」）にたとえているのである。オリゲネスはまた、『諸原理について』（I:3.4）においても、『イザヤ書』を引きながら、「セラフィム（熾天使）は、神のひとり子と聖霊のことである」と注解している（小高毅訳）。天使とイエスと聖霊（プネウマ）とが、こうしてひとつに結びつくことになるのである。

一方、テルトゥリアヌスは、キリストが「偉大なる熟慮の天使」と呼ばれることがあると認めつつも、天使とは使いのことであるから、「役目の点でそうだとしても、本性の点ではない」（『キリストの肉体について』14）と留保をつけることを忘れていない。つまり、天使とキリストは役目の点では似ているとしても、本性の点ではあくまでも異なっている、というのである。

ところで、このように初期キリスト教のなかにくすぶっていたキリストと天使との親近性をめぐるテーマが、現代においてもういちど注目されるようになったのには、ひとつの著作の存在が大きな役割を果たしている。かの名高い医者にして神学者で音楽学者でもあ

るアルベルト・シュヴァイツァーの弟子だったドイツの神学者、マルティン・ヴェルナーが 1941 年に上梓した『キリスト教教義の形成』がそれである（Werer）。

このなかでヴェルナーは、シュヴァイツァーにならって初期キリスト教の時代における黙示論的、終末論的傾向を強調するとともに、さらに初期キリスト教はユダヤ教の天使学から発展したという大胆な仮説を提示したのである。その重要な根拠とされるのは、旧約聖書の『ダニエル書』や外典の『エノク書』などに登場する黙示録的なメシア「人の子」が、天使のような存在とみなされている点である。さらにヴェルナーによれば、天使としてのキリストという考え方は、ニカイア公会議（325 年）において異端として断罪されることになるアリウス派の考え――「子」の位格は「父」の位格よりも劣る――に余命を保っていたという。

この本は 1957 年には英訳も出版されたが、当然ながら予想されるように、多くの神学者たちから批判を浴びることになる。とはいえ、その見解を支持する神学者や研究者たちもいなかったわけではない。なかでもイスラーム学の泰斗アンリ・コルバンはそのひとりで、1981 年に上梓されたその著『一神教のパラドクス』（Corbin）では、ヴェルナーの著書を、抑圧されてきたさまざまな伝統のつながりを浮かび上がらせた「勇気ある」研究として高く評価し、くわえてキリストと大天使ミカエルとの密接な関係性についても言及している（このテーマについてはすぐ後でわたしたちも検討することにしたい）。

浩瀚な『キリスト教史』を著わしたジャン・ダニエルーもまた、「初代教会」を扱ったその第 I 巻において、後に異端とされるようになるさまざまな宗派を検討し、そのなかにはキリストを天使になぞらえる一派――たとえばセト派――がたしかに存在していたことを跡づけた。

さらに 1990 年代に入ると、「天使キリスト論」や「天使型キリスト論」についての著作や論文が、にわかにその数を増してくる（Foster; Gieschen; Stuckenbruck）。イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンとともに天使論のアンソロジーを編んだエマヌエーレ・コッチャは、天使論とメシア論のあいだに存在してきた緊張関係を指摘し、天使とキリストとの類似性には、たんに歴史的なだけではなくて、構造的で論理的な必然性があるとまで述べているほどだ（Coccia）。

こうした近年の研究動向はもちろん、相次ぐ外典の発見や翻訳によって、それまで異端として退けられてきた考え方や、負の烙印を押されてきた人物像――イスカリオテのユダやマグダラのマリアなど――にも、改めて新しい光が当てられるようになったこととも無関係ではない。とりわけ初期キリスト教時代には、正統として今日まで伝えられてきたものばかりではなく、実にさまざまな教説がうごめいていたのである。そのことにわたしたちはもはや目を瞑ることはできない。

Ⅳ．大天使ミカエルとキリスト

さて、ここで先に予告しておいた大天使ミカエルとキリストとの関係について話題を移そう。『黙示録』においてミカエルが「神のメシアの権威」（12:10）と呼ばれていること、『ヘルマスの牧者』において、キリストのイメージとミカエルのそれとが重なっていることは、すでに述べたとおりである。

くわえて間接的な証言も残されている。サラミスの主教エピファニオスが異端を論駁する目的で著わした『パナリオン（薬籠）』によると、エビオン派の人たちは、キリストが父なる神の子としてではなく、大天使のひとりとして創られ、天使や被造物たちの支配者となったと考えていた、という。

みずからを「貧しい者（エビオン）」と名乗り、禁欲的な生活を送っていたこの一派は、イエスは父ヨセフと母マリアのあいだに生まれた人間の子であり、洗礼によってはじめて神性を得たとする、いわゆる「養子的キリスト論」を奉じていたとされる。すなわち、ヨルダン川でイエスが洗礼を受けたときに、キリストがイエスのなかに入ったのであり、そのキリストとは大天使のひとりにほかならないというわけである。先述したように、この説はもちろん、父と子と聖霊の三位一体に反するため、異端とみなされた。

そもそもユダヤ教の天使論において、ミカエルにはひときわ高い位置と重要性が賦与されていた。このことは、ミカエルという名前が、「神に似ている者は誰か」という意味をもつことにも示されている。ミカエルは神の顔の反映であり、神の分身のような存在とみなされうるのだ（Corbin）。

たとえばミカエルは、ユダヤの「天使長」として、異教の「ペルシャの天使長」や「ギリシアの天使長」に対抗し、これらを打ち負かす者とされる（『ダニエル書』10）。キリスト教に帰依した古代ローマ皇帝のコインには、たとえばテオドシウス二世（在 408-450）やユスティヌス一世（在 518-527）のものに見られるように（図 1）、皇帝の肖像の裏面に、十字架と宝玉を手にした有翼の天使――おそらくはミカエル――を彫ったものが少なくない。この大天使は皇帝の守護者でもあるのだ。

さらに、同じく『ダニエル書』によれば、最後の審判のときに、神の裁きを代行するのもミカエルである。いわく、「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。［……］多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」（12:1-2）。

周知のように、キリスト教美術においてくりかえし描かれてきた「最後の審判」の図像では、主役の裁き手はあくまでも再臨してきたキリストで、ミカエルはその下にいて、天国に行く者と地獄に落ちる者とを天秤で振り分ける手伝いをしていることが多い。ところが、その起源である旧約聖書にさかのぼるなら、裁きの主役はまさしく大天使ミカエル

本人だったのである。

また、『黙示録』に由来するテーマ、「ミカエルによる竜退治」もキリスト教美術で好まれてきたものだが、この竜にしてサタンは、生まれてくるキリストの命を亡きものにしようとしたために、ミカエルによって撃退されたのだった。もちろん、これらのテーマにおいてキリストとミカエルが同一視されているというわけではないが、人類の救済や、罪や悪にたいする勝利という点で、両者は類似した性格をもつのである。

ミカエルはさらに外典のなかでも活躍している。『パウロの黙示録』（4 世紀末－ 5 世紀初め）によると、救われる者はミカエルの手に委ねられる。すなわち、「神のゆえに悲しみ、また自分の意志を行なわなかったものが、死んでこの世を離れ、主のところに連れて来られ、礼拝を献げると」、「神の命令によって大天使ミカエルに渡される」（25、佐竹明訳）、というのである。自分の意志ではなく「神の意志に忠実に従った」からこそ、彼らは、ミカエルに委ねられ、預言者の仲間に加えられることになるのだ。

また、同じく外典の『マリアの被昇天（マリアの死）』（5 世紀以降）では、死んだマリアの霊魂は、キリストによってミカエルに託される。これは、マリアへの受胎の告知が大天使ガブリエルに託されたのと対応関係をなしている。

ミカエルとキリストとを同一視することは、もとよりやや無謀であるとしても、その後のキリスト教において、ミカエル信仰がけっして廃れたわけではないこと、それどころかむしろ大いに高まりを見せていたことは、この大天使に捧げられた有名なノルマンディー地方の巡礼地、モン・サン＝ミシェル聖堂が証言している。現在の建物は 13 世紀のゴシック様式によるものだが、もともとは、その山に聖堂を立てよという聖ミカエルのお告げに基づいて、8 世紀に建てられたのが起源とされる。

そうした奇蹟のもっとも早い例が、5 世紀末に三度にわたりミカエルが顕われたとされる、南イタリアのモンテ・サンタンジェロにある「大天使の洞窟」で、そこはミカエル信仰の重要な聖地となってきた。この地にはまた、ルネサンスを代表する彫刻家のひとり、アンドレア・サンソヴィーノが制作した大理石の《聖ミカエル》（1507 年）が残されているが、言い伝えによると、大天使の顔を彫りあぐねていたこの彫刻家の夢のなかにミカエルがあらわれて、手ずから自分の顔を刻んだとされる（ちなみに天使が聖なる絵を描くという言い伝えは、たとえば、フィレンツェのサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂にある作者不詳の 14 世紀のフレスコ画《受胎告知》についても残っている。聖母マリアの顔を描きあぐねていた画家に代わって、天使が仕上げたというのだ。聖なるものの姿を描くことは、人間の手には余る技なのである）。

さらにナポリ近郊のカプアには、大天使に奉げられたサンタンジェロ・イン・フォルミス修道院が建つ。創建は 6 世紀とされるが、11 世紀にロマネスク様式で再建され、その後何度も手が加えられて今に至っている。この修道院教会堂は、内部を飾るフレスコ画（11 世紀末）でも知られるが、なかでもいちばん神聖な場とされる後陣の壁には、四福音

書記者のシンボル――ライオン（マルコ）と天使（マタイ）と牡牛（ルカ）と鷲（ヨハネ）――に囲まれた玉座のキリストの下に、三人の大天使の堂々とした姿が描かれている（図2）。それぞれの頭部に付された頭文字の銘が示すように、中央にいるのがミカエル、向かってその左にガブリエル、右にラファエルという配列であるから、ミカエルにはキリストに準じる重要な位置が与えられていることになる。

一方、ローマには名高い天使城（カステル・サンタンジェロ）がある。もとは2世紀にローマ皇帝ハドリアヌス（在117－138）の霊廟として建造されたが、その後はヴァチカンの要塞や牢獄として利用されてきた。その名は、6世紀の末に天井の頂に姿を見せたミカエルが鞘に剣を収め、ペスト流行の終焉を告げたという故事に由来するとされる。ローマにおけるミカエル信仰はさらに古く、キリスト教にはじめて改宗した皇帝コンスタンティヌス（在306－337）は、大天使を祀る「ミカエリオン」を建てたとされる。

さらに、長靴の半島を上ると、トスカーナ地方の古都ルッカには、八世紀の創建になり、美しいロマネスク様式を現在もとどめるサン・ミケーレ聖堂があり、その正面頂には、二体の天使に囲まれたミカエルの大理石像が据えられている。さらに北上して、フランスとの国境に近いピエモンテ州では、トリノ郊外の標高960メートルの山上に建つ、11世紀初頭のサクラ・ディ・サンミケーレ修道院がその威容を今に伝えている。

もちろんイタリアやフランスだけではない。ノルマンディーのモン・サン＝ミシェル聖堂のさらに先、イングランド南西部グラストンベリーの丘の上には、大天使ミカエルに献じられた12世紀とおぼしき礼拝堂の塔の一部が残っていて、現在ではパワースポットになっているという。

エルサレムを基点にして、これらを順につないでいくと、ギリシアを経由して、イタリア半島を縦断し、フランスからイングランドに達するかたちで、西北西の方向にほぼ一直線に並ぶところから、これを「聖ミカエル‐アポロン・ライン」と呼ぶことがある。これは、古代の遺跡群には直線状に並ぶものがあるという、いわゆる「レイライン」と呼ばれるものの一種とみなすことができる。

とはいえ、考古学とも風水ともつかないような、こうした疑似科学までもちださずとも、ミカエルはその立派な翼で何千キロメートルにも及ぶ空の旅を悠々となしとげ、降り立った地点で守護者の役目を果たしていたのである。古代から中世の人々は、翼のないキリストにはかなわないことを、大天使ミカエルに託してきた、ともいえるだろう。

他方、ビザンチンの東方正教会でも、ミカエルは戦う勇士としてのみならず、病の治癒者としても古くから、キリストにつづくような高い信仰を集めてきた。本章の最初に見たように、使徒パウロは『コロサイの信徒への手紙』において、この土地の人々を「天使崇拝にふける者」（2:18）と批判していたのだが、ミカエルにまつわる「奇蹟」の伝説はまさしくそのコロサイが舞台になっているのである。

この小アジアの町にはミカエルゆかりの泉が湧いていて、それには病気を癒すという

ご利益があった。聾唖の娘をもつ敬虔な父親が夢のなかでミカエルのお告げを聞き、その泉の水を娘に飲ませると、すっかり口が利けるようになる。そこで父親は、感謝の意を込めてこの地に礼拝堂を建てるのだが、それをねたんだ異教徒たちが、二つの川の水を合流させ氾濫させた勢いで礼拝堂を破壊しようと企む。それにたいしてミカエルは、大きな岩を裂いてそのなかに激流を飲み込ませ、危機を救ったのだった。

この話は東方のイコンのテーマによく取り上げられていて、たいてい大天使が岩の裂け目に激流を閉じ込めている場面が描かれる。奇蹟のクライマックスである。そのひとつ、12 世紀のシナイ山の作品（図 3）では、合流して渦を巻く二つの川の流れが、ひときわ大きいミカエルと、やや小さい聖人とを囲み隔てる二つのアーチのような役目を果たしている（Peers）。

ビザンチンではまた、ミカエルが単独でイコンに描かれることも少なくない。そのなかには、板絵ばかりではなく、たとえばヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂の宝物館に伝わるイコンのように、豪華な宝石をちりばめた金銀細工でできているものもある。ここでは、キリストは使徒パウロとともに、左右の円のなかに小さく描かれていて、脇役に回っている。その厳格な正面観の胸像において、ミカエルは、キリストにも劣らない威厳と厳粛さ、超越性と神々しさをたたえている。

さらにさかのぼるなら、ミカエルとも見紛うようなキリスト像も存在する。初期キリスト教時代の要地ラヴェンナにある大司教礼拝堂の壁面を飾るモザイクのひとつ、《勝利のキリスト》（5 世紀末）（図 4）がそれである。十字架を肩にかけ、誇らしげにライオンと蛇を踏みつけるキリストが、全身の正面像で描かれている。これは『詩編』の一節「あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり、獅子の子と大蛇を踏んで行く」（91:13）に基づいている、とされる。

一方でミカエルもまた、『黙示録』に基づいて、悪魔の蛇（竜）を踏みにじる姿で捉えられてきた。たとえば、細密写本画家の名前をとって『クラリシアの詩編歌集』（13 世紀初頭、ボルチモア、ウォルターズ美術館）の挿絵（図 5）のような作例を見ると、キリストとミカエルを隔てているのは、翼の有無のみであるようにも思われる。

アッピア街道に続く古代ローマのサン・セバスティアーノ門には、《大天使ミカエルと竜》（図 6）が刻まれているが、これもまたしかりである。脇の銘文には、1327 年のまさしくミカエルの祝日 9 月 29 日に、教皇派（グエルフィ）にたいして皇帝派（ギベリーニ）の軍の勝利したことが謳われていることから、この当時のものと思われる（Ponzi）。

かくのごとくミカエルは、とりわけ悪魔を退治し、最後の審判で重要な役割を果たし、数々の奇蹟をおこなうという点で、もちろんキリストに並ぶとまではいわないとしても、キリストにきわめて近い存在とみなされてきたのだ。

もうひとり、天使とキリストとをつなぐ存在として忘れてはならない人物がいる。『創世記』に「いと高き神の祭司」として登場するサレムの王メルキゼデク（14:18）である。

同じく『創世記』によると、まだアブラムと名乗っていた頃のアブラハムはメルキゼデクに祝福され、そのことで彼に財産の十分の一を献上したとされる（14:20）。これは、いわゆる十分の一税の起源となるエピソードでもある。ラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂の内陣には、天使をもてなすアブラハムに向かい合うようにして、メルキセデクがパンを神に捧げる場面がモザイクで描かれている（6 世紀前半）。

キリスト教では、この平和の王はイエス・キリストの予型（タイポロジー）とみなされてきた。イエスはまた大祭司でもあり、そのことは、『ヘブライ人への手紙』のなかで明言されている。いわく、「イエスは永遠に生きているので、変わることのない祭司職を持っておられるのです」（7:24）。また同書には、神は「永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです」（7:28）、ともある。というのも、イエスはみずからをいけにえとして献げた者だからである。

一方、天使もまた祭司然とした出で立ちをして登場し、神の祀り事を執り仕切る役目を帯びることがある。「天使たちは、輝く清い亜麻布の衣を着て、胸に金の帯を締めていた」と記しているのは『黙示録』（15:6）である。また同じく『黙示録』には、子羊（キリスト）が第七の封印を開くと、祭壇のそばで金の香炉をもつ天使が登場し、香炉が黄金の祭壇に献げられる（8:3-5）。しかも、死海文書で知られるクムラン宗団のあいだでは、旧約聖書のメルキゼデクは実は天使、とりわけ大天使ミカエルに近い存在で、しかもメシアでもある、とみなされていたようだ（Rainbow）。とするなら、祭司メルキセデスをあいだに挟んで、ここでも大天使ミカエルとキリストとが重なり合うことになる。

次に見ておきたいのは、やはり古くから美術の主題として取り上げられてきた、アブラハムと天使にまつわるエピソードで、ここにおいてもまた、天使とキリストとが交差してくるように思われる。『創世記』（18:1-15）によると、子宝に恵まれないまま歳をとったアブラハムとサラに、「三人の人」、つまり主の三人の使いがあらわれ、アブラハムが彼らを丁重にもてなすと、そのうちのひとりが、サラに男子が宿ったことを告げた、というものである。

この「三人の人」がいったい何を意味するのかについては、古くから三様の解釈があった（Boespflug）。ユダヤ教の聖書解釈の伝統では、彼らは、ミカエルとガブリエルとラファエルの三人の大天使のことだとみなされた。一方、キリスト教では、初期の頃は、イエス（御言葉ロゴス）と二人の天使とみなされたが（殉教者ユスティノスやエイレナイオスなど）、アウグスティヌス以降は、父と子と聖霊の三位一体のことであるとする解釈が主流となる。ちなみに、前者のような解釈がなぜ可能かというと、三人のうちサラに語りかけたひとりが「主」と呼ばれているからである。また、サラにイサクの誕生が告げられるこの話は、大天使ガブリエルによってマリアにイエスの誕生が告げられる「受胎告知」の予型（タイポロジー）ともみなされてきた、という経緯もある。

ここでわたしたちにとって重要なのは、いずれの解釈が正しいのかということではなくて（立場によって変わってくるだろう）、イエスと天使とがやはり分かちがたく結びついているということである。

このテーマは、初期キリスト教の時代からよく描かれてきた。たとえば、ヴィア・ラティーナのカタコンベのフレスコ画（4 世紀）（図 7）では、古代風のチュニカをまとった「三人の人」が、アブラハムの前に姿を見せている。彼らが天使であるかどうかは、翼がないため断定はできないが、この時代にはまだ天使が無翼で描かれることもあった。同じカタコンベにはまた《ヤコブの梯子》も描かれているが、夢のなかの梯子を昇り降りする天使たちにも翼はない。

サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂のモザイク画（435 年頃）では、画面上に、アブラハムに現われる三人、画面下にアブラハムとサラにもてなされる三人が登場している。なかでも、上の真ん中の天使だけがひときわ大きい光輪に全身を包まれているが、これはおそらく、サラに長子の誕生を告げる「主」を暗示していると思われる。ここでも天使と「主」のイメージが重なっているのである。

先述のように、「三人の人」を三位一体の象徴とみなすようになるアウグスティヌス以降も、彼らは基本的に三人の天使として描かれつづける。ニコラ・ド・ヴェルダンによる説教壇前飾りの一部（1181 年、クロイスターノイブルク修道院）のエマイユ画（図 8）には、周りに、「三にして一なる者がかの男［アブラハム］に子孫［イサク］の贈り物を約束する」、「イサクのお告げ」という銘が刻まれている。つまり、三位一体と受胎告知の予型を象徴することが、銘文によってはっきりと示されているのである。

この主題で忘れてならないのは、何といってもアンドレイ・ルブリョフのこのうえなく美しい作品、《聖三位一体》（1411 年頃、モスクワ、国立トレチャコフ美術館）（図 9）であろう。ここではアブラハム本人は登場しないが、聖書にあるマレムの樫の木と屋敷（天幕）を背景にして、ほとんど同じ背丈で同じ顔立ちした有翼の三人の天使が、アブラハムのもてなす食卓についている様子が示される。左の天使から順に、父なる神、子のイエス・キリスト、聖霊を象徴している。つまり、イエスが天使の姿に置き換えられているのである。その証拠に、逆遠近法で描かれたテーブルの中央には、神の子の受難を暗示する聖杯と犠牲の子羊の頭部が置かれている。真ん中の天使（子イエス）はまた、左の天使（父なる神）の方に視線を送っている。これに同調するように、聖霊の天使もまた頭を垂れている。

ここまで見てきたように、テクストにおいても図像においても、天使とキリストとをストレートに一致させたような証言はもちろんほとんどないのだが、とりわけ初期キリスト教の時代には、両者をきわめて近い存在とみなす考え方がたしかにあったことは、お分かりいただけたことだろう。これは四世紀には異端視されるようになるが、だからといって等閑視するなら、わたしたちは、ユダヤ教やキリスト教がはぐくんできた豊かなイメージ世界の最良の部分を見過ごしてしまうことになる。

本論を締めくくるにあたって、中世を代表する女性神秘家で女子修道院長でもあったビンゲンのヒルデガルトに登場してもらおう。というのも、みずからの幻視体験をつづり、女子修道士たちが挿絵を施したことで知られる著書『道を知れ（スキヴィアス）』のなかに、不思議なヴィジョンが描かれているからである。第一の幻視とされるものがそれで、彼女は、「わたしの視界をさえぎるほどの大いなる栄光の御方」が、大きな山の上に座しているのを目撃する。「その両脇には、軟らかい影が伸びていて、まるで幅広で長い見事な翼のようだった」、というのである。つまり、大きな翼をそなえたキリストのヴィジョンを見ているのである（Hildegard of Bingen）。

その挿絵も印象的なもので、文字どおり、「幅広で長い見事な翼」を広げたようなキリストが、山の頂に座している姿で描かれているのである（図 10）。そのキリストの足元からは「栄光」が光の帯となって下りていき、右下にいる「チュニカをまとった子ども」――おそらくはヒルデガルト本人――の頭部にまで達する。その顔はこの「栄光」にすっぽりと浸されている。彼女の向かい側には、「全身を眼で覆われた像が立っていて、これら眼のために、いかなる人間の姿も識別できなかった」という。おそらく、この「全身を眼で覆われた像」も、天使的なヴィジョンであろう。神にもっとも近くて位の高い天使、熾天使（セラフィム）はしばしば、その六つの翼に無数の眼をもつ姿でイメージされてきた。すべてを見渡しているからである。

さらに、同じ著者による『神の業の書』にも、第一の幻視として、きわめて奇怪で興味深いヴィジョンが登場し、やはり挿絵も描かれている（ルッカ、国立図書館、Cod. Lat. 1942, f.1v）（図 11）。中央に立つのは、深紅の祭服を着けた、「美しくて明晰な」人間の姿をした人物である。彼は、十字架をもつ子羊を胸元に掲げているから、おそらくキリストを表わしている。その頭上には、光輪のように「黄金の輪」がかかっていて、そのなかから「より年長の顔のように見える頭部」が突き出ている。これは「年長」とあるから、父なる神と解釈できる。

面白いのはその後につづく記述で、この人物の背中からは翼が幾つも広がっていて、そこからは鷲の頭部や人の顔も見える、という。しかも、画面下では、「恐るべき形相の黒くて毒々しい怪物と蛇」が踏みつけられているのである。ここにはおそらく、幾つもの翼をもつ熾天使や智天使、さらにはサタンを退治する『黙示録』の天使や大天使ミカエルのイメージが重なっているように思われる。その翼に見える鷲や人の頭部は、福音書記者ヨハネやマタイの象徴でもある。

このきわめて特異な幻視についてはさまざまな解釈が可能だろうが、わたしたちにとってきわめて興味深いのは、何よりもまず、キリストと（複数の）天使のイメージが、まるで古代ギリシアのキマイラさながらに重なり合っている点である。おそらくヒルデガルトは、それぞれの図像にある程度まで親しんでいて、神秘のヴィジョンのなかで、それらが合体している様に遭遇したのだろう。夢のメカニズムについて論じるフロイトの用語を

借りていうなら、この幻視のなかで複数の記憶のイメージ――イエス、父なる神、熾天使と智天使、大天使ミカエル――がひとつに「圧縮」されているのである。関連する過去の豊かなイメージのあいだを飛翔しながら、この修道女は、まさしく想像力の翼を自在にはためかせているのである。

さて、このあたりで小論を閉じるとしよう。ここでわたしが明らかにしようと試みたのは、天使とイエス・キリストとの隠れた結びつきである。繰り返しを恐れず述べるなら、それは、抑圧され忘れられてきた天使の側面であるが、それだけに、神学的にも図像学的にも今後のさらなる解明が望まれるきわめて興味深いテーマなのである。

参考文献

『旧約聖書外典』上下 , 関根正雄編 , 講談社文芸文庫 , 1999 年 .

『新約聖書外典』荒井献編 , 講談社文芸文庫 , 1997 年 .

『使徒教父文書』荒井献編 , 講談社文芸文庫 , 1998 年 .

オリゲネス『諸原理について』小高毅訳 , 創文社 , 1978 年 .

同『キリスト教教父著作集 8 オリゲネス 3 ケルソス駁論 I 』出村みや子訳 , 教文館 , 1987 年 .

同『キリスト教教父著作集 9 オリゲネス 4 ケルソス駁論 II 』出村みや子訳 , 教文館 , 1997 年 .

ダニエルー , ジャン『キリスト教史 I 』上智大学思想研究所訳 , 平凡社 , 1996 年 .

ハルナック , アドルフ・フォン『教義史綱要』山田保雄訳 , 神戸キリスト教書店 , 1997 年 .

ユスティノス『キリスト教教父著作集 1 ユスティノス』柴田有・三小田敏雄訳 , 教文館 , 1992 年 .

Angeli. Ebraismo Cristianesimo Islam, a cura di Giorgio Agamben e Emanuele Coccia, Neri Pozza, Vicenza 2009.

Apocrifi del Nuovo Testamento 1 e 2, a cura di Luigi Morandi, Piemme, Milano 1999.

Boespflug, Francois, L*es theophanies bibliques dans l'art medieval d'Occident et d' Orient*, Droz, Geneve 2012.

Carrel, Peter R., *Jesus and the Angels. Angeology and the Christology of the Apocalypse of John*, Cambridge University Press, Cambridge 1997.

Corbin, Henry, *Le paradoxe du monotheisme*, L'Herne, Paris 1981.

Decharneux, Baudouin, *L'ange, le devin et le prophete. Chemins de la parole dans*

l'oevre de Philon d'Aexandrie dit Le Juif, Edition de l'Universite de Bruxelles, Bruxelles 1994.

Foster, Edgar G., *Angelomorphic Christology and the Exegesis of Psalm 8:5 in Tertullian's Adversus Praxean*, University Press of America, Lanham 2005.

Gieschen, Charles A., *Angelomorphic Christology. Antecedents and Early Evidence,* Brill, Leiden 1998.

Hannah, Darrell, D., *Michael and Christ: Michael Traditions and Angel Christology in Early Christianity*, Mohr Siebeck, Tubingen 1999.

Hildegard of Bingen, *Scivias,* trans. by Mother Columba Hart and Jane Bishop, Paulist Press, New York 1990.

Juncker, Günther, "Christ As Angel: The Reclamation Of A Primitive Title," *Trinity Journal* 15:2 (Fall 1994): 221–250.

Peers, Glenn, *Subtle Bodies. Representing Angels in Byzantium*, University of California Press, Berkeley 2001.

Peterson, Eric - Franco Manzi, *Il libro degli angeli. Gli esseri angelici nella Bibbia, nel culto e nella vita cristiana*, Edizioni Liturgiche, Roma 2008.

Ponzi, Eva, *L'arcangelo Michele a Roma. Storia, ideologia, iconografia dal tardo antico al Trecento,* Accademia Nazionale dei Lincei, Roma 2012.

Rainbow, Paul, "Melchizedek as a Messiah at Qumran," *Bulletin for Biblical Research* 7 (1997) 179-194

Stuckenbruck, Loren T., *Angel Veneration and Christology*, Paul Siebeck, Tubingen 1995.

Werner, Martin, *The Formation of Christian Dogma. An Historical Study of its Problem*, translated by S. G. F. Brandon, Harper & Brothers, New York 1957.

図版

図 1
《皇帝ユスティニアヌス一世のコイン》
6 世紀、個人蔵

図 2
《玉座のキリストと三人の大天使》、1080 年頃、フレスコ
カプア、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂

図 3
《大天使ミカエルの奇蹟》、12 世紀
シナイ山、聖カタリナ修道院

図 4
《勝利のキリスト》、5 世紀末、モザイク
ラヴェンナ、大司教座礼拝堂

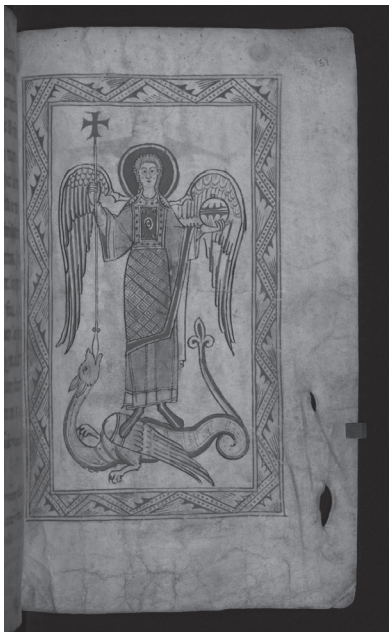

図 5
《大天使ミカエル》、13 世紀初頭
『クラリシアの詩編歌集』より
ボルチモア、ウォルターズ美術館蔵

図 6
《大天使ミカエルと竜》、1327 年頃
ローマ、サン・セバスティアーノ門

図 7
《アブラハムと天使たち》、４世紀、フレスコ
ローマ、ヴィア・ラティーナのカタコンベ

図 8
ニコラ・ド・ヴェルダン
《アブラハムと天使たち》、1181 年、エマイユ画
クロイスターノイブルク修道院

図 9
アンドレイ・ルブリョフ
《聖三位一体》、1411 年頃
モスクワ、国立トレチャコフ美術館蔵

図 10
ビンゲンのヒルデガルト
『道を知れ』より

図 11
ビンゲンのヒルデガルト
『神の業の書』より

【Abstracts】

Angels and Jesus Christ: A Hidden Relationship

Atsushi OKADA

At one time, Jesus Christ was viewed as a type of angel, though today no one would refer to him in that manner. Christ and angels are different entities, and clearly differentiated.

However, in the early days of Christianity, particularly from the 1st century to around the time of the Nicaean Council in A.D. 325, both were viewed as being very similar, if not exactly the same. If one supposes that the role of angels is to serve God, then Jesus Christ was sent from heaven to the Earth to share the word of God, his role being that of a messenger to the world. The New Testament certainly has portions (for example in Paul's Epistle to the Hebrews) that refer, both directly or indirectly, to Jesus Christ as an angel, showing that this line of thinking existed in ancient times.

Several apocryphal writings refer to the notion of Jesus Christ as an angel in a more straightforward and positive manner than the somewhat rude phraseology used in the book of Revelations, or the negative and indirect words of the apostles. For example, a reading of the "Gospel of Thomas" or the 2nd century apocalyptic writings such as "The Shepherd of Hermas" shows that some certainly viewed Christ and angels as being the same, or mostly the same, and that the writers of the Gospels and the Apostle Paul quickly tried to suppress such ideas. It is also not the case that there were no church fathers or theologians favorable to this teaching. For example, Justin Martyr's "First Apology" and Origen's "Against Celsus" fit this mold. Iconographically, Michael the Archangel and Christ were often shown in very close relation to one another.

In recent years, research in the fields known as "Angel Christology" and "Angelmorphic Christology" are gradually bringing to light teachings on Christ that were either viewed as heretical or forgotten. Based on such prior research, this discussion calls to mind the hidden relationship between angel worship and faith in Christ.